

## 第四節 戦国時代の出石

### 1 山名致豊・誠豊

#### 致豊の継職

致豊が家を継いだだが、但馬の不安は解消しないばかりか、ますます混乱の度を加えた。一五〇〇年(明応九)五月、前將軍足利義材(當時義尹と改名)の使者伊勢貞仍が但馬に来て、復権のために山名氏の力を借りたいと申し入れた。義材は一四九三年(明応二)二月畠山政長の議をいれて宿敵畠山義就の子義豊を討つために河内に出兵中、細川政元に背かれて將軍職を追われ、京都竜安寺に幽閉されたが、脱出して越中に逃れた。京都回復をねらってその名も義尹と改め、一時は近江坂本まで進んだが失敗して河内に走り、さらに海路を周防に下って、大内義興を頼った。再起を図る義尹は周防から諸將に使者を送って助力を求めた。その使者は京極政経・山名尚之・一色義直らを歴訪して但馬の山名致豊のところへも来たのである。

しかし、諸將はだれひとりとして応ずるものがいなかった。いずれも分国の内部統一に苦しんでおり、そのゆとりがなかったのである。致豊もまた例外ではなかった。



写真 152 山名致豊書状 (竹野町 興長寺蔵)

ある垣屋氏に代わって、主家の支えとなった。

一五一二年（永正九）、山名致豊は家督を弟の誠豊のふとよに譲った。家督を交替することで内紛解消を図ったのであろうが、その背景には当時の京都の複雑な政治の動きが絡んでいた。

將軍義澄（初め香厳院清晃、のち義退、義高と改名）は、一四九三年（明応二）四月、細川政元に擁立され、翌年加冠して將軍となったが、政元の専横を嫌って和せず、何度も衝突をくり返していた。前將軍義種（初名義材、のち義尹）は越中に脱出して復活の機を狙い、一四九九年（明応八）以後は周防の大内氏に擁せられて上洛の機を窺うかがっており、政情不安の原因となっていた。この間、幕府の実権を握っていた細川政元には子がなく、一族の高国を養子としていたが、さらに九条政基の子を養子に迎えて家督に擬して聰明丸を名乗らせた（聡

#### 但馬の内戦

一五二四年（大永四）八月の沙門某の出石大明神勅進状によると、出石神社は年一五〇四年（永正元）夏、軍勢が乱入したとき火災を起こして、社壇堂舎仏像経巻をはじめ末社諸神に至るまで一時に灰燼かいじんに帰したという。この兵乱は、山名致豊と垣屋続成の対立であった。

「垣屋系図」によれば、垣屋続成は蔭木城の合戦で戦死した越前守（政忠）の子だといひ、一四九三年（明応二）から一五〇二年（文亀二）まで約一〇年間、主君致豊と対立抗争したという。このころ、致豊を支えていたのは田結庄氏であった。田結庄氏はその名のとおりに、出石に近い城崎郡田結庄を本拠とする土着の豪族である。田結庄氏は、山名氏の執事的立場に

明丸は細川満元・持之・勝元・政元の代々の幼名で、家督となるものが名乗った。ところが一族の者は聰明丸の家督を喜ばず、阿波の守護家から澄元を迎えて家督に擬して六郎と名乗らせた（細川勝元が聰明丸から六郎を名乗る）。九条家から養子に入った聰明丸は九郎を名乗った（政元は聰明丸から九郎を名乗る）。家督に擬せられるのが二人になって、政元自身は九郎澄之を廃して六郎澄元を後継者としようとしたが、家臣のなかには澄之を推すものも多く、不安はますます広がった。一五〇五年（永正二）六月、將軍義澄が山名致豊と垣屋統成との対立を和解させようと努力したのも、周防の大内氏に奉ぜられている義植の上洛に備えて山名氏を自分の戦列に加え、できれば山名氏領国の備後を上洛阻止の前線としたためである。

前將軍義植と対決するために結束しておかねばならないひざ元で、義澄は政元とあわなかったが、一五〇七年（永正四）六月、細川澄之は香西元長・薬師寺長忠らと謀って養父政元を暗殺し、さらに澄元と三好之長を攻めてこれを近江に敗走させ、一挙に権力を握った。河内・大和・丹後の各方面に出陣していた政元与党の軍勢は、いずれも解陣し、崩壊した。

澄之は政元の後継者になったが、細川高国・同尚春らは澄之を攻めてこれを殺し、その与党を掃討し、香西元長・薬師寺長忠らは戦死した。かくして近江に逃走していた澄元が入京して、改めて政元の家督を相続した。

一方、河内では畠山義就の後継者義英と、同政長の後継者尚順とが合戦と和解をくり返していた。両者の対立にも応仁の乱以来の根深い怨念おんねんが絡みついている。

すなわち西軍の義就と東軍の政長の対立に、父政長を細川政元のために殺された尚順の怨念おんねんが絡み合っ

いた。畠山尚順は政元を廃して澄元を擁立しようとして、政元に殺された薬師寺元一に与同(味方)していた。また尚順は政元を共通の敵とすることで義英とも和睦し、危機が去ればまた義英と対立して相争うといった状況を繰り返したのである。

政元が殺されたのち、澄元は畠山尚順と和睦し、畠山義英を攻めるための援軍を送ったが、前將軍義植も尚順を与党と考えていた。義植は畠山政長とともに義就の死後弱体化した義豊(義就の子)を討つために河内出陣中に政元のクーデターにあつてその職を追われたのだから、政長の子尚順は当然与党のはずだからである。

このような京都と畿内の複雑な対立と混乱を、周防の前將軍義植が好機の到来とみたのは、もっともなことであつた。

一五〇八年(永正五)二月、前將軍義植は大内氏に奉ぜられて周防を発して安芸に達した。義澄は、斯波義敏・朝倉貞景・大内高弘・少貳資元・菊池政朝・大友親治らの諸將に出陣を命じて義植の入洛を防ごうとした。山名致豊のところにも使者が送られて、出陣が命ぜられたが、致豊は垣屋氏との対立がまだ解消していなくて動けなかつた。諸將も多くそれぞれ領国に問題をかかえていた。朝倉貞景は領内の一向一揆を理由にして出陣を辞退している。

細川澄元は義澄に謁して、義植上洛を防ぐことを誓ったが、その重要な時点で細川高国は澄元と対立して伊賀に走り、そこで挙兵して摂津の伊丹元扶・



写真 153 山名致豊開基の願成寺

丹波の内藤貞正・伊賀の仁木高長らと与党として京都に迫った。澄元の与党は三好之長ら阿波衆が中心で、畿内近国には高国党の勢力が強く、それだけに高国党が優勢であった。澄元らは京都の邸を自ら焼いて近江に走り、將軍義澄も支持勢力を失って近江に脱出した。前將軍義植は細川高国・畠山尚順らに迎えられ、やがて京都に入って將軍に還補された。細川高国は管領家の家督と認められて右京大夫に任ぜられ、摂津・丹波の守護を兼ねて、幕政の実権を握り、やがて管領となった。

近江に逃れた前將軍義澄は、一五一一年（永正八）八月、近江で三二歳の生涯を閉じたが、幼児を播磨の赤松義村に託していた。赤松義村は義澄の澄元派であった。

山名致豊が義澄の催促に応じなかったのは、領国の不安から応じ得なかったためであるが、そのうちに京都の状況が急変して義植が將軍に復活すると、これまで義植からの助力要請を無視してきた致豊としては、よけいに苦しい立場に立たされることになった。

『但馬史』には、「致豊は義植派であった垣屋氏の契めで上洛して義植に謁した。一五〇八年（永正五）二月その功によって垣屋光成は毛氈鞍覆もせんくらおおい・白傘袋あじろふし・網代輿あじろこしの使用を許され、礼として馬一疋・青銅三〇疋を將軍に献上した」と記している。一五二三年（大永三）六月、播磨守護代浦上村宗が將軍義晴から同様の待遇を与えられた事実があるが（『御内書案』）、垣屋氏が山名致豊の上洛を実現させただけで、そのような厚遇に与ったとは、ちょっと考え難いことである。

そればかりか、『長享後畿内兵乱記』とか『細川両家記』のような軍記物にも、但馬の山名氏の動きは全く描かれてはいないのである。致豊以後の山名氏は、もはや中央政界を動かすだけの影響力をもつことがで

きないほど、弱体化してしまっていたといわねばならない。

致豊、誠豊に 一五二二年（永正九）、山名致豊は弟誠豊に家督を譲った（『但馬村岡山名家譜』。「老する故

家督を譲る に」というのが理由であるが、致豊はまだ三五歳の若さであった。病気だったらしいが、

「老す」という年齢ではない。出家入道して宗伝と号したというが、四年後の一五一六年（永正一三）五月にも「致豊」と署名した文書が残っているから（『垣谷文書』、出家入道したわけでもなかった。もし、一五二二年の誠豊の家督が事実であったとしても、致豊はまだ在俗で知行安堵を与えているから、誠豊を後見していたのであろうか。いずれにしても致豊から誠豊への交替は、但馬国衆の妥協の産物であって、細川高国の政権が安定し復活將軍義植の地位が安泰性を増すにつれて、義澄派の色彩の濃厚であった致豊を隠退させる必要があったらしい。一五一八年（永正一五）一月、山名次郎が將軍義植に当年の祝儀として太刀一腰と鴛眼千疋を献じ、義植は書を与えてこれを賞したが（『御内書案』、この山名次郎は誠豊のことらしい。誠豊を家督とすることで將軍家との関係の修復をはかろうとする山名氏の狙いがここにも読みとれる。誠豊を

誠豊の播磨 一五二二年（大永二）六月、山名誠豊は日光院に次のような願文を奉った。

進攻 立申願之事

一 播州発向達本意、一七日参籠之事

一 神馬七疋之事

一 於播州一所寄進之事

一 面鳥居可立之事

一百番神楽毎年可参事

以上

(『日光院文書』)

その前年九月、播磨守護赤松義村は家臣浦上村宗のために室津に幽閉され、そこで暗殺された。遺臣たちは遺児道祖松丸(才松丸とも書く)を奉じて淡路に逃れ、播磨は大混乱に陥っていた。浦上村宗は幼主の逃亡した置塩城を接收し、播磨西半分と備前東半分とをほぼ支配下に収めた。

山名誠通は、播磨の内紛を好機到来とみたのである。垣屋氏以下の国衆たちも播磨侵入を支持したらしい。着々と準備を整えた山名勢は、一〇月一六日に但馬を出発して、永良口から播磨に侵入し、一〇月二

四日に粟賀(神崎郡神崎町)の法楽寺に着陣し、十一月一日には広峰山(姫路市)に陣所を構えた。

幼主道祖松丸は淡路で元服して政祐と名乗っていた。のちに政村と改名し、さらに將軍義晴から偏諱を与えられ晴政と改名した置塩城三代目の城主である。政祐を奉じた遺臣たちは、九月二四日に福泊(かつての韓泊)に上陸した。今の姫路市の形町福泊で、その北方にある大貫山と高峯山に陣を構えた。これに対して浦上村宗は九月晦日(三〇日)に書写坂本城に出陣し、態勢を整えて大貫山・高峯山の陣を攻めようとしており、また政祐軍の一部は村宗が出陣して留守になった備前三石城(みついし)を攻めるために、三石へ進んでいた。

永良口から南下した山名軍は、このような播磨の内紛につけこんで容易に広峰山まで進出したのであるが、



写真 154 山名誠豊の願文(八鹿町 日光院蔵)



写真 155 法楽寺観音堂（神崎町）

政祐方の浦上村国や同村景らは山名方と同心していたという（『鶴荘引付』）。揖保郡鶴荘いかりがには田結左右馬助、垣屋新介五郎、田公方足輕衆田中・北村らが過分の兵糧米徴収に入部したというから、西播一円に山名方の支配が行われたことが分かる。

山名氏の支配を現実として経験した浦上村宗と政祐方の浦上村国らは、これまでの行きがかりを捨てて和議を結び、協力して山名軍にあたることを約束した。

書写山の敗 一五二三年（大永三）一〇月、山名誠豊は自ら諸軍を率

戦 いて書写山に攻めのぼり、浦上同名（盟）軍と合戦に及

んだ。同名軍というから、村宗・村国連合軍であろう。「則時仁山名

方打負」と『鶴荘引付』が書いているから、決戦は意外に早く決着が

ついたらしく、山名軍は教輩の戦死者を出して敗退し、山名軍は但馬に引き揚げた。父政豊の怨念を晴らすうとした誠豊が、意外に思い切りよく撤退したのは、父の二の舞いを演じない用心であったのであろう。両浦上が対立抗争しているのに乗じて播磨に進攻したものの、それが和解し協力し抵抗してくるとなると、実に手ごわい相手であることは、父政豊がすでに経験済みである。誠豊が思い切りよく撤退しただけに、山名方の被害は最少限度にとどまった。





写真 156 八上城本丸跡の石垣  
(篠山町 朽木史郎氏提供)

誠豊、丹波 一五二一年(永正二八)三月、將軍義植は細川高国の専横を憤って淡路に出奔し、京都には將に出兵す 軍が不在となった。高国は困って、赤松義村が養っていた前將軍義澄の遺児龜王丸を都に迎えて、これを將軍とした。すなわち一三代將軍義晴である。前將軍義植は二年後の一五二三年(大永三)四月阿波でその波乱に満ちた生涯を終わる。前將軍義澄・三好之長・細川澄元・前將軍義植と相次いで死んで、細川高国に敵対する勢力はなくなった。したがって高国政権は安泰であるかのようにみえたが、思いがけぬところから崩れ始める。

一五二六年(大永六)七月、高国のよき協力者であった細川尹賢は高国の執事香西元盛を讒言し、高国の命令と偽って元盛を自殺に追いこんだ。香西元盛は丹波の波多野氏の出身で、讃岐の名門香西家の名跡をついでいたのだが、兄の波多野植通と柳本賢治の二人は、弟元盛の仇を討とうとして阿波の細川六郎(澄元の子、のちの晴元)と通じて、同年一〇月、丹波八上城・神尾寺城に拠って高国に反した。これまで細川高国を強力に支持してきた丹波の勢力が、にわかには離反して反対勢力と結んだのであるから、高国はにわかには危機に直面することになった。將軍義晴を擁して幕政を握る高国は、越前の朝倉孝景・播磨の赤松政村(政祐の改名)・浦上村宗、但馬の山名誠豊、近江の六角定頼らの近隣の守護・守護代に出陣を命じた。翌大永七年三月、將軍義晴は山名右衛門督(誠豊)に対して「於

丹波<sup>(丹波)</sup>、長々在陣、粉骨之至、尤感悦候」という内書を下して、その出征の労をねぎらった(『御内書案』)。

しかし、反高国派の中心となった柳本賢治は丹波をほほ制圧して京都に進出し、高国派を撃破した。高国は將軍義晴を奉じて近江に走った。山名誠豊に於てた内書は、実は近江から出されたものであった。情勢の急変を知った阿波の三好元長(之長の子)は、將軍義澄の子義維(義晴の弟)と、幼主細川晴元を奉じて和泉の堺に至り、畿内の情勢はいよいよ混乱の度を加える。

#### 山名誠豊の

#### 死

当時の但馬は、垣屋・八木・太田垣・田結庄・田公などの有力な国衆が、それぞれ半ば自立してそれぞれの支配領域を固めつつあったが、山名誠豊はともかくも父祖以来の此隅山城にあって対外的、名目的には但馬守護家としての權威を保持していた。しかし、山名惣領家の弱体化は伯耆・因幡の守護家の離反を呼び起こし、山名一族の結束はもはや崩れていたのである。

伯耆の山名氏は一五二四年(大永四)正月、尼子経久の侵入をうけ、敗戦を重ねて五月には伯耆を棄てて因幡・但馬に逃げ込んできた。誠豊は因幡守護をも兼ねていたが、因幡の山名氏は但馬の惣領家からの自立をはかって対立し、幕府に請うて豊時の孫誠通を守護としたために、二人の守護が並立し一五二七年(大永七)ごろには両者の関係は戦火を交えるまでに悪化していた。同年五月、將軍義晴は但馬守護山名誠豊と、因幡守護山名誠通(山名治部少輔、『校補但馬考』は山名豊重とするが、誠通が正しい)に内書を下して、和解させようとはかった(『御内書案』)。義晴としては山名氏が内輪もめで分裂しては困るからである。そして同年六月には、誠豊に重ねて丹波への出兵を命じている。

一五二八年(大永八)二月一四日、山名誠豊は多くの問題を残して、三三歳(二説には三六歳)で病死した。祐

豊があとを継いだだが、祐豊は致豊の子らしい。

致豊はまだ健在で、その死は一五三六年（天文

五）七月三日、六五歳であったという。

山名誠豊の死によって、但馬はいよいよ中央での重みを失った。それ以後は、京都の史料に

登場することが少なくなる。『但馬史』が祐豊以後を本格的な戦国時代とした理由も、また肯けるのである。

## 2 山名祐豊・氏政

祐豊の西進 誠豊の跡をついだ祐豊の名は、しばらくは全く現れないが、一五四〇年（天文九）一〇月、に

### 政策

わかには伯耆に侵入して尼子氏と戦ったことで姿をみせる。祐豊は、持豊・政豊・誠豊と続いた播磨侵攻の南下政策を捨てて、伯耆・因幡への西進政策をとったのである。伯耆は氏祖時氏が初めて伯耆守護を拜命して以来の由緒の国であるが、一五二四年（大永四）の「大永の五月くずれ」によって尼子氏に奪われていた。

尼子氏に追われて因幡・但馬に逃げ込んでいた伯耆衆が、大内氏との対戦で尼子方が手薄になっているすきを狙って失地回復をはかったといったほうが正確かも知れない。祐豊も家臣たちの反対をおして出陣したが、尼子詮久が差し向けた同国久の迎撃にあつて、退却せざるをえなかった。伯耆衆を見棄てて退却したのだから、完全に伯耆を失ったことになる。ということは、因幡を急速に防衛する必要に迫られる。因幡守護



写真 157 山名致豊  
位牌（願成寺藏）

山名誠通は、尼子氏と友好的であった。友好的であることで侵略を免れてきたのである。祐豊は因幡山名氏との内輪もめを再燃させて、これを領国化することが是非とも必要になってきたのである。

祐豊、叙位 一五四〇年(天文九) 一二月、但馬守護山名祐豊は従五位下に叙せられ、右衛門督うせもんのかみに官途した  
官途す (任ぜられた)。右衛門督は山名師義しげいらい、代々の当主が任ぜられる官途で、時熙・持豊・

政豊・誠豊と相次いでおり、その故をもって山名右金吾と称せられてきたのだから、祐豊が旧例に従って右衛門督に官途したのはごく当たり前のことといつてよい。ただ、さきの伯耆出兵が、敗退したとはいえその名を高めたことは事実であつて、この官途もその意味では伯耆出兵の余波であつた。翌天文一〇年六月、幕府は石清水八幡宮若宮造管遷宮料の奉加を、細川晴元・和泉守護細川元常・但馬守護山名祐豊・近江守護六角定頼らの近国の守護に命じている。細川晴元は宿敵細川高国を倒し、將軍義晴を奉戴して実権を握つたが、家宰三好長慶と対立してその地位は安泰ではなく、戦国動乱期の真只中の時期である。

祐豊の外交 そのころ、山名祐豊は因幡守護山名誠通と因幡の岩井で戦火を交えていた。祐豊と誠通との政策 因幡制覇をめぐる対立は、一五四八年(天文二七)祐豊の完全勝利まで続けられることになるのである。

この年すなわち一五四一年(天文一〇) 一二月、山名祐豊は大坂石山本願寺の証如しょうにょ(光教)に物を贈つて誼(親しい交際)を通じた。北陸における一向一揆の隆昌は無視できないものがあり、河内の一向衆は木沢長政と結んで細川晴元をも脅かしていた。祐豊は早くこれと妥協しておくことを有利とみたのである。赤松氏が長く領内における一向衆を禁止していたのとは対照的な対応であつた。但馬の一向衆については後述するが、

ここでは祐豊の遠交近攻の外交策の一つとしてのみ指摘しておこう。

一五五三年(天文二三)四月、毛利元就は備後で尼子晴久の兵と戦った。備後は山名氏領国のひとつであるが、俊豊以来惣領家の支配から全く離れてしまっていた。大内氏の勢力が安芸から備後にのびてくると、当然これと衝突することになり、これまでも大内氏に何度か攻められているが、出雲の尼子氏が台頭してくるに及んで、備後の国衆のなかに尼子氏に通ずるものが出てくる。備後の江田氏が尼子氏に通じ、毛利元就は大内氏の属将として江田氏を攻めたのである。このころ祐豊は尼子氏と対立関係にあったから、元就を応援した。備後の山名氏はこのち毛利氏に屈服し、一五五七年(弘治三)四月、山名理興が病死してその後嗣が絶えると、元就は理興の一族山名盛重にその跡を継がせている。

祐豊の外交政策は一種の遠交近攻策であって、遠方の強敵とは友好関係を結び、近隣諸国と戦火を交えているようにみえるが、実は首尾一貫しておらず直面する眼前の状況によって、それまでの態度を一変させることがまれではなかった。場当たりの便宜主義といわれても仕方のないやり方をとっている。

初めは尼子氏と対決していたが、尼子氏の力が増大していよいよ危機に直面しそうになると尼子氏と結ぶ。尼子氏と結ぶと、尼子氏と対立している毛利氏とは敵対関係に陥らざるを得ない。織田信長が上洛してくると使者を送ってこれと誼を結ぶ。しかし、兵力を送ったり、自ら兵を率いて戦列に加わるでもないから、相手も信用はしないし、いよいよ攻撃されそうになると周辺の有力者を頼ろうとする。ある意味では、それは戦国時代を生き抜く弱者の不可避的な処生術でもあった。まして、祐豊には名門山名氏惣領家の誇りも高かったであろうから、祐豊としてはそれは精一杯の生き方であったともいえるのである。



写真 158 生野銀山絵巻(伊丹市 大野通夫氏蔵)

生野銀山の 一五五四年(天文二三)三月、山名祐豊は朝廷に白銀三〇〇両を献  
 発掘 上した。つづいて一五五六年(弘治二)四月にも白銀二〇〇両を献  
 上している(『御湯殿の上の日記』)。

生野銀山がいよいよ本格的に稼動しはじめたのである。生野銀山は、古く八〇  
 七年(大同二)に発見されたという説もあるが、『銀山旧記』によれば、一五四二  
 年(天文二)二月、初めて鉱石を掘り出したという。戦国時代はわが国最大の黄  
 金狂時代で、戦国大名たちが領内の目ぼしい鉱山を探しまわり掘りつくした感さ  
 えある。石見の大森銀山をはじめ諸国から鉱山師が集まって来て、各所の鉱脈が  
 発見され、たちまち本格的な稼動が始まった。祐豊の三〇年にもわたる因幡戦争  
 を支えたのは、この生野銀山からの産銀であったろうが、反面、大森銀山の領有  
 が大内・尼子両氏の死闘の原因であったように、生野銀山は力ある織田信長から  
 狙われる好餌(こうじ)となり、但馬山名氏の滅亡を早める原因となったのもまた事実であ  
 る。

織田信長上洛

以後の但馬

一五六八年(永祿一一)九月、織田信長は足利義昭を奉じて入京し、たちまちのうちに三好  
 三人衆(三好長慶の部将の三好日向宇長逸・岩成主税助友通・三好下野守政康の三人をいう)の反抗  
 を制圧した。信長の上洛によって、畿内を中心とする政治情勢は一変した。それまでは京都を中心とする畿  
 内とその周辺だけで続いていた戦乱紛争が、にわかに地理的に拡大されて、全国的規模をもつようになった。

つまり、信長による天下統一がその緒ちもとについたといふことだが、それまでは中央政界の影響を直接受けることの少なかつた但馬も、一挙に渦中にのみこまれることになつたのである。

のちには信長と対抗して反信長勢力の核となつた毛利氏だが、初めは信長と連携しようとして積極的に接近した。一五六九年（永祿二二）八月、毛利元就は朝山日乗あさやまにちじようを使者として信長のもとに派遣し、播磨・但馬の制圧を要請した。この時期毛利氏にとっては山名祐豊と宇喜多直家の存在が大きな障害物となつていたからである。

信長は木下秀吉・坂井政尚らに摂津の伊丹衆・池田衆らの兵二万をつけて出兵させ、朝山日乗が軍監として従つた。

此隅山城落城し 織田方の軍勢は八月一日に但馬に入り、「利運して」同一三日には帰国したといふ『細

祐豊堺に出奔 川阿家記』。この織田軍の但馬侵入は織田信長のもつとも確実な伝記である『信長記』

にはみえないが、諸書に記されていて事実であつて、このとき此隅山城・垣屋城などの一八城が落城し、生野銀山も制圧されたといふ。わずかに二週間の電撃戦に但馬の山名氏は壊滅的打撃をこうむつたことになる。

恐らく鉄砲隊の威力によるものであつたらう。但馬はこの新兵器からも取り残されていたのに違ひない。

『重編応仁記』には、「山名ノ子孫等皆国人ニ背カレ悉滅亡シテ不日ニ退治成就シケレバ、八月十三日兩将モ加勢モ帰陣セシム、於是、山名故入道宗全ノ嫡流ハ但馬ニ断絶ス」と書かれている。山名祐豊は国衆の被官人たちに離反されて、居城此隅山城もたちまちの間に落城し、山名氏嫡流はここに滅亡した。但馬を預かり支配したのは坂井政尚だが、やがて間もなく引き上げたので、但馬のどこにいたのかも分からない。

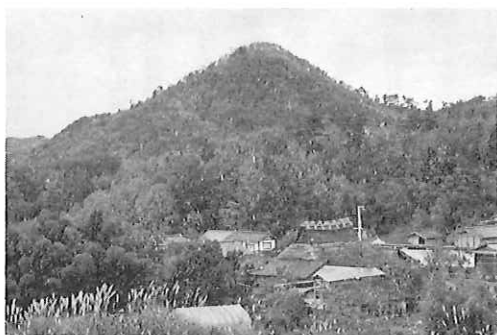


写真 159 此隅山城跡(東面)

山名祐豊は但馬を出奔して、和泉堺の商人渡辺宗陽を頼ったらしい。宗陽は屋号を錢屋(ぜにや)といい金融業者であった。祐豊は信長の御用商人今井宗久の斡旋(あつせん)で、但馬帰国が許されることになる。茶人として有名な宗久は屋号を吹屋(ふきや)という鉄の商人で、優秀な山鉄の産地と生野銀山を領内にもつ山名氏に強い関心をもっており、坂井政尚や播州の別所重棟(べっしょしげ)(別所長治の叔父)までも動員して、祐豊の但馬帰国を実現させたらしい。祐豊の帰国は同年冬には実現する(『今井宗久日記』)。

翌一五七〇年(永禄二三)三月、「但州小田垣兄弟(小田垣)」が信長に謁して、いるのは『言繼卿記』、山名氏に代わって生野銀山の支配権をめぐり、発言力を増した太田垣氏が織田信長と直接結びつこうとしたことを示している。

### 但馬の内紛

続く

帰国後の祐豊の威権は全く失われてしまっていた。それでも祐豊はなお権力の回復を必死に求めた。はかっていたらしい。一五七一年(元亀二)十一月、山名祐豊が丹波山垣城を攻めてこれを陥れたと伝えられるのは『波多野系図』、その表れである。一五七三年(元亀四)正月、祐豊は次子義親(二一歳)を病死させた。さきに長子棟豊を病死させていたから(永禄九年五月、一八歳で病死)、祐豊の落胆は察するにあまりある。祐豊はこのころ韶熙(あきひろ)と改名したらしい。一五七五年(天正三)正月、毛利輝元は山名韶熙・氏政父子と和睦した(『萩藩閥閥録』)。五月には吉川元春と誓紙を交換した。これには太田垣輝延・垣屋豊統も加わ



っている。これも尼子氏の圧力に対抗するためには、毛利氏の助力を必要としたためである。

但馬国衆の内戦は、断続的に慢性化してしまっていた。一五七五年(天正三)一〇月、垣屋豊統は田結庄是義を急襲してこれを自殺させた。この対立は毛利与党の垣屋氏が、織田与党(反毛利という点から尼子与党でもあった)の田結庄氏を倒した事件で、その後には明智光秀の策謀があったとされるが、垣屋氏に対抗しながら山名氏の支えにもなっていた田結庄氏の滅亡は、山名氏をいよいよ孤立させることになる。

此隅山城から 山名氏の居城が此隅山から有子山に移されたのは一五七四年(天正二)ごろのことだとされ有子山城へ ている。

此隅山は標高一四〇メートルほどの丘陵で、さほど險阻けんそな山容ではない。播磨の赤松氏の本城白旗城は標高四四〇メートルの白旗山頂に築かれている。嘉吉の乱の舞台となった城山城はさらに高く四五七メートルに及ぶし、赤松政則が新しく構えた置塩城でも三六〇メートルのけわしい山頂に築かれているから、山名氏の此隅山城はいかにも貧弱な居城である。しかも山頂に平坦な本丸を構え、数カ所の曲輪が階段状に作られているとはいっても、石垣や大規模な堀切りをもたず、中世山城としては堅固というにはほど遠い小城ではない。山名時義は、何故、このような防御能力のない此隅山に本城を構えたのであろうか。理由は、少なくとも二つあると思われる。

戦史をひもとくまでもなく、赤松氏は白旗城では新田義貞の率いる六万余騎の軍勢に包囲されて昼夜五〇余日も猛攻をうけ、よくこれを耐え忍んだが、城山城では山名軍の総攻撃を受けてわずか一日で落城した。もちろん赤松中心と赤松満祐の戦術の巧拙による点もあるにせよ、義貞が囲みを解いたのは、九州からの尊

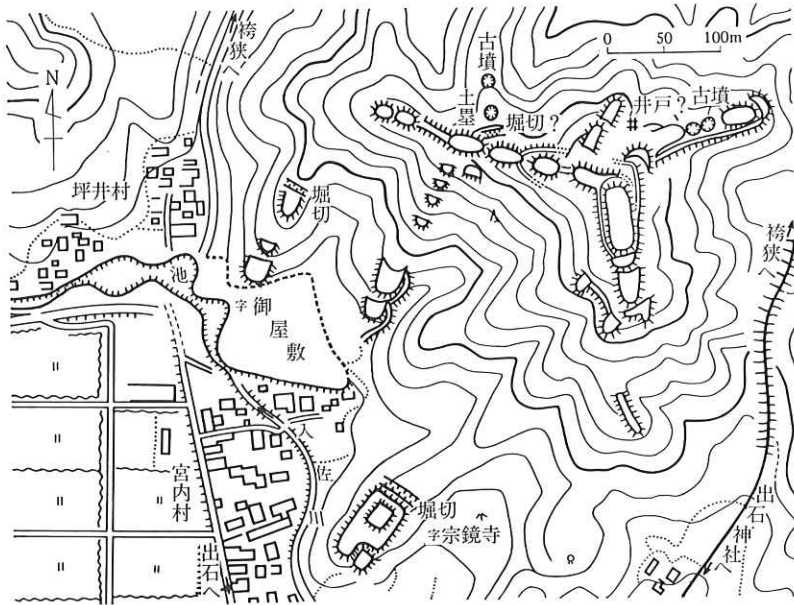


図 38 此隅山城遺構略測図 (豊岡市 小谷茂夫氏測図)

氏・直義兄弟の上洛を聞いたからである。籠城こじょうというのは戦術からいえば消極的な戦法だが、籠城している敵を完全に包囲するためには、通常敵の三倍の兵力を必要とするといひ、彼我の兵力に格段の差があつて尋常の野戦では勝ち目がとうてい無いと見込まれる場合に、少数派が籠城作戦をとることになる。三倍以内の敵であれば、敵の油断に付け込んで城から出撃して敵に痛手を負わせ、これを繰り返しながら味方よりはるかに多勢の包囲軍を最終的に撃退することもできるかも知れない。籠城戦はそのような可能性に賭かけてとられる戦術なのだが、自力で籠城戦を戦い抜くことは備蓄した兵糧ひやうりやうや武器からも困難であつて、なるべく早い時期に援軍が到着しなければ、結局は兵糧や武器が尽きて自滅する。

山名氏のとつた戦術には籠城戦は一度もな

い。山名時氏以来、山名氏は常に攻撃戦法をとっており、敵地へ出撃して野戦を挑むか、籠城している敵を攻めるばかりで、本国に攻め込まれて本城で籠城することは、およそ考えていなかったと思われる。

籠城を考慮すれば天険の利を選ばねばならないであろうが、初めからこれを計算に入れないとすると、領国統治の政治的・経済的意味だけを考えればよいことになる。但馬は地形的に、円山川の流域と矢田川の流域に二分され、円山川流域は下流域と上流域とに二分されるが、矢田川流域では西に偏して流域の平野も小さい。円山川流域の上流域、すなわち朝来・養父二郡には早くから山名氏に帰属した太田垣・八木氏が居り、山名氏がこの根拠地とする場合は当然摩擦が予測される。反面北但は南朝勢力が強かった地域でそれを打倒することで山名氏は但馬を制圧したのだから、前代以来の有力な豪族が少ない。摩擦がないばかりか、ここを抑えることは伯耆・因幡との海上連絡線を確保する意味から必要であった。北但で居城を求めるときはまず南朝軍の拠点であった三開山城が格好の地を占めている。山名時氏が攻めてこれを陥れ、ここを居城として但馬守護を僭称せんしょうしたことは既述のとおりである。織田信長が、攻め落とした稲葉山城を改修し、その名も岐阜と改めて天下盗りの根拠地としたことはよく知られているが、普通は自分が攻略した敵城を自分の居城とする例はごくまれである。縁起をかつぐ意味もあるし、同じ攻め方で落城することが明白だからでもある。

山名氏が三開山城のほかに居城を構えるに至ったのも同じ理由だと思われるが、此隅山城の場合は出石神社との関連を無視できない。此隅山は出石神社のすぐ隣の山だからである。つまり、但馬土着の豪族でない山名氏は、但馬国の一の宮である出石神社を尊崇し保護することで、但馬の民心をつかもうとしたのだと思

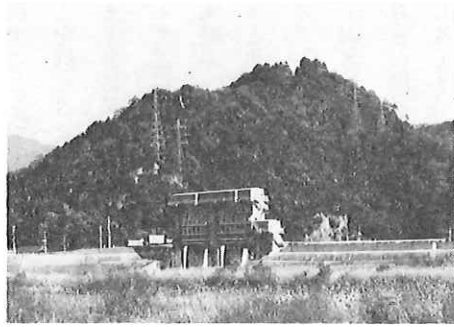


写真 160 鶴城跡（豊岡市）

われる。当時の出石川は水量が豊富で、出石付近までは水運が通じていたし、その門前には市場も開かれていたらしく宮内にはシイ市場の小字名が残っている。後述するように神宮寺・総持寺をはじめ多くの宮寺があつて社僧も多く、かなり繁栄した集落を形成していたと考えられる。

此隅山に登れば、眼下には出石・小坂・神美の平野を見下ろし、田結庄氏の鶴城（豊岡市山本）や垣屋氏の鶴峯城（日高町観音寺）方面まで遠望できて、わずか一四〇メートルばかりの丘陵ではあるが意外に眺望が利く。背面の袴狭からみると山容は急峻まげで、小山ながらもそれなりの堅固さをもっていた。

此隅城下には重臣被官たちの屋敷が構えられ、また山名氏による菩提寺が建立されたと思われる。重臣たちの屋敷は、のちに有子山頂に城郭を移したときに移築したらしく、今も出石城下に残る田結庄町・八木町・宵田町などは、それぞれ田結庄氏・八木氏・垣屋（宵田）氏が屋敷を構えた跡だという。城下町が此隅山下に営まれていたころには、それらの重臣たちの屋敷も此隅山下にあつたはずである。小字名を残しているのは宗鏡寺・願成寺・太平寺で、宗鏡寺・願成寺は城地の移転に伴つて出石町下に移り、太平寺は廃絶したらしい。

そのほかでは、唱念寺（現昌念寺）も、もとは此隅山下にあつたと伝え、本光寺（現本高寺）も古くは城崎郡田結庄（豊岡市北部及び城崎町の一部）にあり一四七三年（文明五）に此隅山下に移り一五九五年（文祿四）に今の



写真 161 有子山城(高城)跡

出石に移ったという(『校補但馬考』)。

有子山城の 山名祐豊が標高三二一メートル、比高(現地における高さ)三一〇メートルの急峻な有子山の山

築城 頂に有子山城を築いたのは、一五七四年(天正二)のことであった。東の但東町から続く連峰

山地の西端に位置し、山麓を東から西に流れていた出石川は、ここで大きく九〇度北に曲がるから、南と西の二方向を出石川で守られた形になっている。城跡は山頂の本丸には高さ三〇四メートルの石垣を積み上げ、西へ四つの曲輪を梯郭状に繋ぐ。西端の曲輪を西の丸と呼び、石垣の高さは四・三メートルから一部は五・三メートルに及び、その西の曲輪を蔵屋敷と呼ぶ。本丸跡は四〇メートル×二四メートルのほぼ長方形をな

し、その東南隅に三階櫓があったという。石垣は荒々しい古式の野面積みで、この主郭部をとり囲むように数か所の侍屋敷と呼ぶ曲輪が散在する本格的な戦国山城である。

山名祐豊はそれまでの此隅山城を、一五六九年(永禄二)に織田信長の部将羽柴秀吉に攻められて落城させられたが、織田方の軍勢が但馬から引き揚げたのちに、残存勢力を結集して築城したのが、この有子山城である。城は初めから織田・毛利・尼子などの諸氏の軍勢に対抗して築かれており、いわば籠城して戦わねばならぬ危険性を予想して築かれた城であったのである。城郭史の大勢からいえば、この時代は中世山城から近世城郭への過渡期に当たっており、戦術も鉄砲の普及とともに一変しつつあった。此隅



写真 162 有子山城跡の石垣

山城からより急峻な有子山城へ移ったことは、時代の趨勢に逆行していることになるのだが、それは但馬の後進性を示すと同時に、此隅山城がひとたまりもなく、あまりにもろく陥落したことのショックがこのような逆行の原因だったのであろう。

しかし、険阻な有子山頂における本格的な戦国山城の築城は、付近農民に苛酷な負担となつて強制されたであろうし、時期が時期だけに工事が夜を日につぐ強行であつたことを思うと、その負担はますます苛重であつたに違いない。落日の山名氏がこの築城によつて費やした金品もまた莫大であつたであろうから、有子山城の築城は結果的には山名氏の没落をいっそう加速度的に速めたことにならなかつたと考えられる。

山名・毛利

山名氏が有子山城に移つた翌一五七五年(天正三)正月、因幡の山名豊国と垣屋豊統の仲介で

両氏の和議

芸但和睦が成立し、山名韶熙(祐豊)・氏政父子は連署の起請文を吉川元春と交換した(五月二

八日付、『吉川文書』)。山名家臣では垣屋氏・八木氏が熱心な毛利党であつたが、田結庄氏はむしろ尼子党で

あり織田党であつて、そのために垣屋豊統に攻められて滅亡することになるのである。同年一月二四日、

八木豊信は吉川元春に長文の書状を送つて、但馬の情勢を中心に織田・武田氏の動きを報じている。書状は

一一か条にわたるが、出石(山名韶熙・氏政父子)・竹田(太田垣輝延)が信長へ連々懇望し、惟任(明智)光秀が

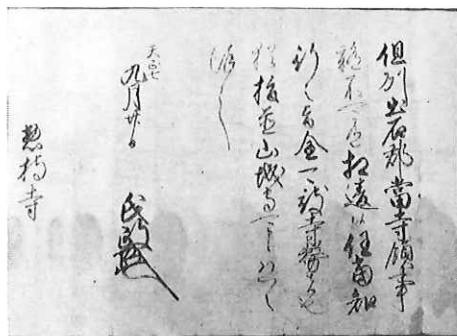


写真 163 山名氏政書状 (総持寺藏)

丹波に乱入したこと、それによって竹田表にいた荻野(赤井)直正は引き退いて黒井城に楯籠ったこと、しかし付近の城を包囲され兵糧も続かないから来春までは保ち難く、丹波の国衆の過半は光秀に従ったこと、但馬では宍田・西下らが心変わりして織田方に寝返り、豊信の説得に応じないが、今のところ目立った動きはないこと、光秀の使者が信長の朱印状をもって但馬に来て諸將を勧誘しているのが、宍田・城崎・田結庄・西下らは出石の山名氏に背くことができなくて和議が成立したらしい、というのである。山名父子は起請文を交換して芸但和睦を誓ったが、織田信長にも荻野直正の竹田城攻撃を訴えてその救援を連々懇望していたのである。この段階ではまた毛利・織田両氏はまだ決定的に対立していたわけではなかったが、翌一五七六

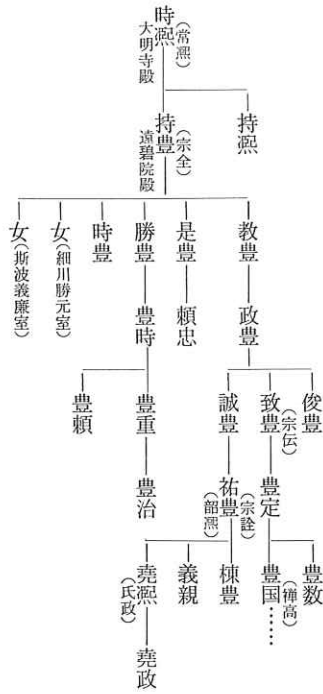
年(天正四)五月、毛利軍に囲まれていた若桜鬼ヶ城を脱出した尼子勝久・山中鹿之助が但馬に逃げ込んで信長を頼り、また信長に追われた將軍足利義昭が毛利氏を頼るようになると、毛利・織田両氏の武装平和はたちまち決裂し、山名氏を初めとする但馬の諸將たちは、いよいよその立場を鮮明にせざるを得なくなってくる。

羽柴秀吉の 一五七七年(天正五)一〇月、播磨に攻め込んだ羽柴筑

南但制庄 前守秀吉は、播磨国中を夜を日に継いでかけまわり、

諸將から人質をとり固め、余勢を駆って但馬に侵入し、山口岩洲城を攻め落とし、太田垣氏の竹田城に殺到した。太田垣輝延は戦わずして退散し、秀吉は弟秀長を城代として在城させ、一転して播磨上月城を

表 47 山名氏略系図—その2—



攻めてこれを全滅させた。「上月の城に楯籠る残党悉く引き出し、備前・美作両国の境目に張り付けに悉く懸け置き」という恐るべき大量殺戮をしたうえに、福岡野城でも首数二五〇余を切り捨てたという（『信長記』）。秀吉はこの但馬・播磨の戦功によって、乙御前の釜を拝領して、織田家の重臣入りを果たすのである。

順調にみえた秀吉の播但制圧は一五七八年（天正六）二月の別所長治なかはらの反撃で一挙に崩れた。別所氏は一五七五年（天正三）以来、織田方の播磨制圧の先鋒をつとめてきたばかりか、大和にも出兵し織田方部将として活躍してきたのだから、織田方としては予想外の造反であった。加うるに同年一〇月には、荒木村重が有岡（伊丹）城に拠って信長に反した。別所長治も荒木村重も、ともに毛利氏に誼を通じての反抗であった。

三木城を包囲した秀吉軍のなかには、竹田城を守っていた秀長が呼び戻されて加わっている。秀吉はせっかく手中にした南但を放棄せざるを得なかったのである。竹田城はまた太田垣氏のものとなった。但馬には東の間の原状復帰が実現することになる。



山名氏の滅

一五八〇年(天正八)正月、別所長治兄弟が  
亡 自刃して三木城が落城すると、秀吉は急い

で播磨の再制圧に着手し、宇野民部一族の楯籠る宍粟郡を  
征服し、播磨一向宗門徒の中心英賀を陥れ、姫路を根拠地  
と定めた。

同年四月、秀吉は再び弟秀長を但馬に侵入させた。『信長  
記』には、「是より羽柴筑前守、舎弟木下小一郎に人数差

し加へ、但馬国に乱入、即時滞りなく申し付け、木下小一郎は(本)小田垣居城に拵(し)へ、手の者共見計らひ、所々  
に入れ置き、兩國平均に候キ」と書いてある。実は『信長記』には、小田垣として太田垣輝延は登場するが、  
出石の山名氏のことについてはまったく触れるところがない。織田方からほとんど問題にされていなかった  
ともいえる。

出石落城は同年五月一六日のことであつたという。山名氏政が出石を棄てて因幡に出奔したと承図に記さ  
れている目である。父の韶熙(祐豊)はその五日後の五月二一日に出石城で病死したという。七〇歳であつ  
たと伝える。氏政は老体で病床にあつた父を見棄てて因幡に敗走したらしい。強大を誇つた山名氏嫡流の滅  
亡は、あまりにも悲惨な痛々しい情況の中で進行したのである。韶熙は宗詮と号しており、法名は銀山寺殿  
鉄壁熙公大居士、出石の智明院に葬した。

因幡に出奔した氏政は、のちに名を堯熙(たかひろ)と改め、秀吉に降服してその馬廻衆に加えられた。一五八二年



写真 164 伝山名祐豊墓(法城寺)

#### 第4節 戦国時代の出石

(天正一〇)に播磨国加古郡の土地を与えられたことが、『有馬文書』などに見える。法号を円成院殿一翁仙公大居士といい、一六二四年(寛永元)七月三日、七十二歳で死んだとする系図もあるが、実は子の堯政とともに関ヶ原合戦では西軍石田三成に与していたらしく、大坂城に迎えられその最後は分からない。堯政は父の跡を継いで秀吉の馬廻衆であったが、一六一五年(元和元)五月七日に戦死した。山名氏嫡流はここに断絶したのであった。

## 第五節 中世の文化

總持寺の歴 出石町宮内の東光院總持寺は、山号を応峯山と称し、真言宗の古刹こまつ（古いお寺）で、真言宗高史 野山派に属している。寺伝によれば行基が天平年間（七二九～七四九）に、天日槍が新羅国から

將來した聖觀音自在菩薩を本堂に安置し、一六区の僧坊を建て、応峯山總持寺と号したのに始まるという。もとは、背後の標高三〇〇メートルの山上にあったという涅槃寺ねはんがその前身で、のちに下山して現地に移り、總持寺と改めたとの説もある。要するに、開創の時期も、開基の僧の名もよく分からないう古刹である。平安時代以降は、出石神社の神宮寺じんぐうじとなって祭祀さいしに関与したといわれるが、一三八七年（至徳四）六月日付の寂靜院明仙寄進状（『總持寺文書』）によれば、「但馬国一宮大社之惣持寺并神宮寺」とあって、惣持寺と神宮寺は別の寺院らしく書かれている。いずれにしても、惣持寺の僧が、但馬一宮出石大社の供僧として、諸役を勤仕したことは事実である。

山名持豊の最盛期にあたる一四五一年（宝徳三）九月七日の供僧方諸役目録



写真 165 總持寺本堂

によれば、供僧は出石大社一六所の王子に因んで一六口と定められており、経所において、天下泰平と公方御祈禱のために毎日大般若経の長日勤行が行われるほか、次のような諸役を勤仕した。

一 春の彼岸には大乘講会があり、神官が勤めた。

一 秋の彼岸には法華八講があり、供僧衆が勤めた。

一 毎月一七日に、神宮寺で一七日、講会があった。

一 正月元日に神前の経所に出仕、御頭は寺僧交衆の順に勤めた。頭主が神主方へ小極（酒たる）一持参する。

一 正月一〇日修正会があり、御頭は寺社一所、米一斗と懸餅・牛玉紙三帖を両方の頭主が出す。神主方へ小

極一出すのは前と同じ。

一 正月一五日武射温泡に出仕。御頭は供僧衆より勤め、三木酒小極二を神前に供える。八頭の衆から小極一ずつを神前に供える。小極一を神主殿へ出すのは同前。

一 正月一七日に武射仁王講会がある。天下国土御祈禱のためで、布施物として講米六斗、散米二斗、白米三升宛を出し、饗甘一膳菜五色は神官から出す。三木酒極八、入亀一。

一 一八日から三日間、神宮寺で御行出仕。御頭は寺社一所で、一八日は神官が勤め、大餅三、小餅廿、小極

一、牛玉紙三帖宛、頭主より別当坊へ渡す。

一 九日の御行は別当坊が勤め、供僧衆が出仕する。

二〇日は供僧衆が御行を勤め、御頭は前と同じ。

一 毎日御供は専堂が請け取る。

- 一 二月朔(二)日出仕、餅が出て、御百膳出仕。
  - 一 三月朔日出仕、同三日にも出仕。
  - 一 卯(四)月朔日出仕、これは大勸進坊が勤める。
  - 一 五月朔日出仕、同五日にも出仕。
  - 一 七月朔日出仕、同七日にも出仕、大乘経転読あり。
  - 一 九月朔日出仕、同九日には御幸があり出仕。
  - 一 一 一 月の初卯は新嘗衣(会カ)で、両夜出仕、辰日の巳刻(法華)に八講会があり、極二を社家から出す。
  - 一 一 二 月神主殿へ御幸出仕、また祭礼中にも出仕がある。
- 出仕とは神前で行われる祈祷勤行に参加することである。この諸役定書には、一いちのかしやう和尙旭清と年行事覚舜の二人が連署している。『兵庫県神社誌』には、天文六年(一五三七)一 一 月二五日付の「但馬国一宮惣持寺諸職寺法事」を載せており、これによれば、惣持寺本堂では、毎月朔日・一七日・一八日・正月晦日に大般若が、一 二 月朔日には大般若経が(大般若と大般若経がどう違うのかよく分からないが)勤行され、懈怠けたい(なまけること)すれば過銭(罰として出す金銭)五文を年行事に出すこと、涅槃講(二月一五日)勤行を懈怠すれば過銭三〇文。七月一五日の施餓鬼せがき、九月五日の引声いんせい、一 二 月一 二 日の仏名経(ふつう仏名会は一 二 月一 九 日から三日間だ)の勤行を懈怠したものは過銭五文。一宮百膳の三月三日・五月五日・九月九日の出仕を懈怠したものは過銭三〇文、その他のことを申し合わせている。供僧十六口の上臈じょうろう(高位の僧)を一和尚といひ、年行事(のちに少年行事が加わる)が庶務を担当したらしい。

一五二二年(大永二)には東光院・千光院(手)・安樂坊・中坊・十如坊・南之坊・法花院・東之坊・安養坊・葉師院・上乘坊・西林坊・宝乘坊・弥勒院の一四の坊中があり、近世になって一六八八年(貞享五)には東光院・般若院・千手院・正福院・光明院・自性院・不動院・明王院・正覚院・長寿院の一〇坊はいずれも院号を称して存続していた。東光院はこれらの寺内坊中のうちでもっとも有力で、かつ由緒も古かったらしく、現在の総持寺が東光院総持寺と称しているのも、東光院が最後まで惣持寺を支えてきた名残りであろうと思われる。

さて、惣持寺(現総持寺)は出石神社の神宮寺としてその祭儀にかかわったほかに、本尊観世音菩薩がこの地方の人々に広く尊崇された。およそ観音信仰は、その功德を説く観世音菩薩普門品(法華經の第二五品、ぶつ観音經の名で知られる)にも顯著に見られるような、即効的な現世利益を特徴としており、また阿弥陀如来の脇侍仏とされることから、浄土信仰とも深く結びついて、さらにその信仰の領域を拡大して広く大衆の信仰を集めるようになった。

例えば一四五四年(享徳三)一月二二日には、風早(宮内に風早の字名がある)の六大夫は土器給分の山一所(東は源尾、西は田の畔、南はツハイ原の塚、北は大杉を限る四至内)を後生善処のために惣持寺本尊観音に永代寄進している。

惣持寺は、子細あって多年他所に遷っていたが、一四七二年(文



写真 166 風早六大夫寄進状 (出石神社蔵)



写真 167 (垣屋) 豊遠安堵状 (出石神社蔵)

明四(ころ)に往古の蹤跡(しよせき)(元あったところ)に任せて堂舎を旧地に再興した。このとき境内山林田畑以下を先々の如く寺家進退相違あるべからずという安堵状を受けた。五月一六日付の安堵状の署名は豊遠で、六月一日付の署名は遠治となつてゐる。社伝では、豊遠を山名宗全の二男山名越前守豊遠、遠治を豊遠の子としてゐる。惣持寺が敷地の証文坪付を証拠書類として提出し、在国の遠治がこれに京都の豊遠のもとに送り、豊遠が一見を加えた上で安堵状を下し、遠治が安堵状にとが遵つて、濫訴(らんそ)を企て狼藉を致す輩は堅く罪科に処すことを惣持寺年行事に令したという経緯は、文面によつて明らかであるが、持豊には豊遠という子などいかなかった。

諱を許されたものである。持豊はその子に、教豊・是豊・勝豊・政豊・時豊といずれも豊を下につける名を名乗らせた。このうち教豊は將軍義教から、勝豊・政豊はそれぞれ義勝・義政から偏諱を与えられた名である。持豊はこれに倣(なら)つて、豊の字を家臣に与えたいらしい。

垣屋越中守豊春の名は、いわゆる「垣屋系図」には見えないが、天隱(てんいん)竜沢(りゆうたく)の『翠竹真如集』(さいしやくしんじゆ)にはその寿像贊が収められている。天隱は播磨国揖西郡栗栖村千本の出身で赤松氏と親交があり、ことに赤松政則の事実上の傅(ふ)であつて、山名氏

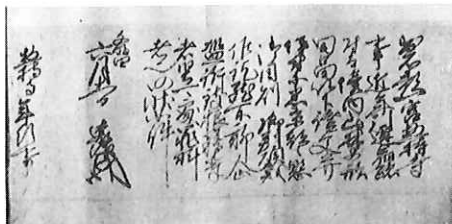


写真 168 (河越) 遠治安堵状 (出石神社蔵)

被官の垣屋越中守豊春の寿像贊を書いたのは、太田垣美作入道（法諱は宗収、号は徳忠）の肖像贊を書いたのとともに異例のことに属する。さて、天隠は豊春を齊の桓公の名臣管仲に比し、その風丰（ふうさい）を評して「鬚髯（ひげ）は青松の雪を帯するが如く、面目は蒼隼（はやぶさ）の秋を横ぎるに似たり」といつている。豊春の名が、持豊から許された名であることは、まず間違いない。豊の字を名乗りの最初に付けた名としては、持豊の庶子で養子に出された豊久があるが、その他の多くは家臣である。ややのちに出てくる中村豊重・垣屋豊績・八木豊信らの山名被官の重臣たちの名は、いずれも同じ例として誤りあるまい。越前守豊遠はその官途の越前守よりすれば恐らく垣屋氏であろうと考えられるが、豊遠はまた主君の例に倣って、家臣に遠の字を与えたいらしい。『日光院文書』には、文明九年（一四七七）六月一三日付の越前守豊遠安堵状と、同年八月七日付の河越遠治安堵状があるが、河越遠治がさきの惣持寺文書にみえる遠治と同一人物であることは間違いない、垣屋氏の被官と考えてよい。

#### 出石神社の

出石神社は、一五〇四年（永正元）夏、山名氏の内紛による兵火に罹って全焼し、惣持寺もまた全焼した。神主の源（長尾）家治は早速にその復興を企てた。一五〇九年（永正六）一一月に

#### 焼失と再興

は、垣屋三郎右衛門尉之為が弘原の田地一段を寄進したのも、一五一六年（永正一三）八月に竹元六郎左衛門尉辰久が、土野荘の一宮太上田の一段を寄進したのも（『神床家文書』）、ともに出石神社再興のための施入であったであろう。

もちろん寄進はこの二例だけではなく、ほかにも多くあったとは思われるが、全焼した出石神社の再興はなかなかはかどらなかつたらしい。中心となるべき大檀那の山名氏が内紛のために、十分な援助ができな



ったのが最大の問題であって、もし山名氏の威令が貫徹していれば、再興の事業もさほど困難ではなかったはずである。ともかく、再興の事業は遅々としてはかどらず、二〇年後の一五二四年（大永四）八月になって、ようやく沙門某が十方施主の助成を仰ぐ勸進状を作り、遠近尊卑の助縁を求めることになった。その勸進状には、

当社大明神（天日槍のこと）は、忝かたじけなくも粟散ぞくさ辺地の小国（日本のこと）を守り、敬愛福寿悉地のために垂迹すいじやく和光の形を現し、新羅国より影向こうきやう有あつて但（刑）笏津居山浦しやくしんに着く。爰こゝに国中の郡里郷海水を漫々たまたと湛たえ更に人民住むべき所居なきを知る。然る間、所持する御剣をもつて峨々がたる巖兩瀬戸を切り開く、是れ則ち衆生済度の善巧、慈悲深重の化現なり

という文言があつて、出石大明神が国土開発の神として認識されていたことを示している。勸進状には、これに続けて、出石大明神の本地を十一面観世音菩薩としており、のちに惣持寺本尊が十一面千手眼観世音菩薩として造立されることも関連する。

出石神社の再興がいつ完成したのかは分からないが、『神床家文書』のなかには「享禄五年神職たち（二五三二）十一月初卯日」の日付をもつ祝詞いのちが残されていることから、このころまでには社

壇がほぼ再興されていたと考えてよいであろう。この祝詞には、神床かんどの祝はより（神職の階級）、乙祝おとほよりの祝、大祓おほぎ宜



写真 169 一宮社修造勸進状（出石神社蔵）

の祝、請取の祝、今祢宜の祝、今井の祝、御守の祝の七人の祝と、神床のいさかへ、乙祝のいさかへ、大祢宜のいさかへ、請取のいさかへ、今祢宜のいさかへ、今井のいさかへ、御守のいさかへを列挙して、「都合して（合わせて）十四人」と表現している。「いさかへ」の語義はよく分からないが、「いさ」は「天日槍」の別名でもあり、「伊佐カ部」かとの説もある。神床以下の七家がそれぞれ祝と「いさかへ」との対<sup>たい</sup>になっていることから考えると、祝よりは下位の神職らしい。かりにこれを権<sup>ごん</sup>祝<sup>しゆ</sup>的な神職と考えておくことにする。祝といさかへの順序は、決して無意味に列挙したものではあるまい。神床と乙祝、大祢宜と請取と今祢宜、今井とお守の三つに分類できると思われる。ここでは、多分、祢宜と祝の序列は確立してはおらず、七人ともに祝であって、神床の祝はその最上席を占めていたらしい。七人の祝の上には神主家としての長尾家があった。

祝詞でいま一つ注意されるのは、出石神社の祭神が、正一位出石大明神と二位のきさきの宮、および七所の王子とされていることである。「延喜式」の神名帳では「伊豆志坐神社八座」が並びに名神大社に列していたことは既にしばしば述べてきたが、戦国時代の出石大明神とは夫婦神と七人の子神たちと観念されていたのである。

#### 総持寺本尊

#### の造立

総持寺観音堂の本尊十一面千手千眼観世音菩薩が造立されたのは、一五三五年（天文四）のことであった。観音像は立像で、像高一六八センチメートル、十一面・四二臂<sup>ひ</sup>の通常の千手観音像であるが、胎内に納入された天文四年未<sup>ひ</sup>乙六月十八日付の「惣持寺本尊造立勸進奉加帳」の表紙には千手千眼観世音菩薩と書かれている。像は榧材<sup>かや</sup>の寄せ木、内刳<sup>く</sup>造りで玉眼を入れてある。

全像ほとんど素地のままで、わずかに頭髮に群青、唇に朱、髭に墨を用いてあるだけなのは、漆を塗り鍍金するだけの力がなかったのであろうか。同勸進奉加帳によれば、本願は十穀聖で、諸国遍路の六十六部聖であった西林坊光盛で、脇本願として菊蔵・智善房・聖行徳の三人がこれを助けており、また同年五月十日付の「但馬国出石郡一宮応峯山惣持寺本尊造立奉加施主人帳事」によれば、乃木日向守・同若狭守・加陽豊後守・秋庭伊賀守・荏原加賀守以下多くの山名家被官衆・東光院清祐以下の惣持寺の住侶(僧)と稚児たちもこの奉加に加わっていたことが分かる。本願をつとめた西林坊光盛も惣持寺の住侶のひとりで、菊蔵・智善・行徳の名も見える。中坊旭祐・十如坊盛舜・東之坊舜祐・宝乗坊暹祐の四人がそれぞれ舍利一粒を、福王寺が舍利三粒と舍利容器となる塔一基を奉加している。

さて、奉加帳には、山名祐豊の千疋を筆頭にして、山名氏被官層と出石神社関係者ら約七〇名によって計約二五二〇疋、在地有力者および農民約六〇〇名ほどが約六二〇〇文を寄進しており、その他に綿・布・米・麦などの現物寄進が一〇数名、どの程度寄進したのか分からないが、名前や生まれ年のみを書き連ねた者が約八六〇名程度あって、全部で優に一五〇〇名を超す人々の奉加によって、この尊像が造立されたことが知られる。



写真 170 十一面観音胎内文書上包み紙 (総持寺蔵)

表 48 奉加帳記名者 (20疋以上)

100疋	三宅豊後守, 長尾権守, 森戸左馬尉, 伊帙大和守, 己歳
50疋	乃木丹後守, 同人, 神床□理進, 荏原加賀守, 間岡五郎左衛門尉, 伊帙美作守
20疋	乃木日向守, 同人二親, 大田垣 <sup>(加賀)</sup> □守, 神床兵衛右衛門尉, 森戸左衛門尉, 粟井□京進, 須谷若狭守, 同内女, 森戸左衛門尉, 家城与二郎, ハノ竹下石見守, 垣屋六郎衛門, 覚仏

にすれば次のようになる。

奉加した人  
 山名祐豊の千疋の奉加は群を抜いて多いが、山名家被官と出石神社関係者約七〇名の奉加は、百疋、五〇疋、二〇疋、一〇疋の四クラスに分かれる。このうち二〇疋以上のものを一覽表

一〇〇疋の奉加をしたのは三宅豊後守・長尾権守・森戸左馬尉・伊帙大和守・己歳(進藤入道のことか)・乃木丹後守(五〇疋が二口)の六人である。長尾権守は出石神社の神主家の当主であろう。三宅氏は神美の三宅付近の国人、乃木氏は佐々木氏庶流で出雲国能義郡能義村または意宇郡乃木村を領して乃木氏を称した豪族といい、のちに毛利家臣となって乃木希典<sup>まれすけ</sup>大将を生んだことで知られるが、この時期にはその一流が出石付近に所領をもっていたのであるうか。乃木日向守と同丹後守の二家に分立していたらしい。森戸氏は山名氏に従って当国に来た武士らしく、森戸姓は今も但東町に多いから、所領はその付近にあったのであろう。伊帙氏は伊秩氏のことか。伊秩氏はふつうイツツと訓じ、出雲国神門郡伊秩郷の出身というから、乃木氏と同様に山名氏の被官となって、出石付近を領していた豪族であろうかと考えておく。このほかには一〇疋のグループに加陽豊後守の名が見えるが、豊岡市加陽を領した豪族であり、多々良木和泉守は朝来郡多々良木荘を本貫地とする国人、<sup>えぼ</sup>荏原加賀守はおそらくは武蔵国荏原郷から来但した関東御家人であろう。



写真 171 十一面観音胎内文書・奉加帳冒頭部（総持寺蔵）

六〇〇名におよぶ百姓と思われるグループには、すけ村・出石ハタ・カワハタ・ハタ・ハタの村など在所を注記したものが散見する。奉加した百姓たちの広がり示すと同時に、注記しない百姓の多くが宮内を中心とする地元農民であったらしいことをも示していると考えられる。

総持寺の本尊はこのような武士・神官・僧侶・農民などのさまざまな階層の人々の膨大な勸進奉加によって造立された尊像であったのである。

人々の願い

これらの一五〇〇名を超す人々は何を願い何を思っ金品を寄せて、この観世音菩薩像の造立を助成したのであるうか。奉加

帳には、特定個人の名や「七世父母六親眷属」の文句がみえる。たとえば、天文四年五月十日に護持孝子敬白と書いたある男は、天文元年壬辰四月十九日に死んだと思われる性善禅定門ほか一〇人の法名を列記して「三界万霊六親眷属各霊位」のための奉加であると書いており、同じ日付の光永南坊（寺内の南坊の住侶光永）は、禅慶法印以下四八名の僧名を列挙し、さらに自分の名（光永南坊）と本願の西林坊光盛・少武公光運ら七人の名を逆修（生前に死後の安業を祈って仏事を行うこと）として掲げ、さらに欲ばって「三界万霊七生父母六親眷属」と梵字<sup>ぼんじ</sup>二行で諸仏諸菩薩の名を掲げて「南無大師遍照金剛、南無阿弥陀仏」と記している。逆修として掲げた福井与一左衛門・虎千代・妙法らの名は、光永の父母兄弟たちの名でもあろうか。つまりこれらの人々は、自己と自己を取り巻く有縁無縁の人々の追善供養と、後世善処の往生を願って助成をした



写真 172 時宗寺院西光寺（豊岡市）

のである。戦乱の時代を必死の思いで生きていた戦国時代の人々が、せめて後世の至幸をこい願った痛いほどの願望が、あるいは自分たちと同じようにあまり恵まれた一生を過ごしたとも思えない父祖や縁者たちの、後世の善処をも併せて願わねばおかなかったのであるうか。

総持寺は真言宗の寺院であったから、結縁けちえんの奉加帳ほうかちやうのなかに「南無大師遍照金剛」の文句や光明真言の種子が見えるが、圧倒的に多いのは「南無阿弥陀佛」の念仏の名号である。結縁者のなかにも、雅阿弥、淨阿弥陀仏、正阿弥陀仏、桂阿弥、觀阿弥など幾人かの阿弥陀仏号または阿弥号を名乗る人々がいる。阿弥号または阿弥陀仏号を名乗る者すべてが時衆の徒というわけではないが、口小野区くちののに遊行寺ゆぎょうじの小字名があることが時衆の徒というわけではない。豊岡市の九日市や竹野町には今も有力な時宗寺院があり、但馬は時宗の盛んな地域でもあったのである。

歌枕、入佐 但馬の有名な歌枕うらさに入佐いりさの山がある。吉田東伍の『大日本地名辞書』には、「出石郡神美村の山 宮内の此隅山のつづきの嶺みねを云ふとぞ、今明白ならず」と書かれている。入佐山の名が初め

て表れるのは『後撰和歌集』の

梓弓入佐あすきゆみの山の秋霧のあたるごとくやいろまさるらん

であって、その後には、縁語として「入佐川」や「入佐の原」も詠まれるほどに歌枕の名所となった。それ

らの歌は、梓弓を射ると入佐の山をかけたたり、または月の入る、妹と居るにかけたりする掛けことばの面白さから古来多くの歌人に愛用されてきたが、その所在地が分かるような手がかりをもつ歌はなく、所在地は不明とされていたのである。

入佐山が但馬にあると最初に言いだしたのは順徳天皇であった。天皇は『八雲御抄』巻五の名所部の「山」の項で、「入佐の山」の右肩に「但」の一字を付けてこれが但馬にあるとされたのである。天皇がどのような根拠から但馬と断定したのかは分からないが、父の後鳥羽上皇から歌を学んだ天皇であることを思うと、あるいは後鳥羽上皇の説を祖述されたものであったのかも知れない。

さて、『名所栞』には、入佐山の景物として

霞、花、帰雁、鵲、五月雨、照射、雁、鹿、月、霧、紅葉、落葉、時雨、椎柴、雪、嵐、松風、雲、松、鷹、山あらゝき

などを掲げている。確かに入佐山はさまざまな景物のなかで詠まれたが、入佐山を和歌に詠んだ都の歌人はおそらく一人として但馬に来てその歌を詠んだわけではなからう。そもそも、入佐山が但馬にあるとされても、但馬のどの山が入佐山なのか、はっきりとはしていなかったのである。入佐山が此隅山の山続きの山とされた理由も定かでないが、宗鏡寺の沢庵和尚が故郷の歌枕として入佐山を詠んだ歌を多く作るに及んで、宗鏡寺の裏山を入佐山と固定するようになった。沢庵が入佐山を詠み込んだ和歌はすこぶる多いが、

めぐりきて入佐の山の月も日も

はるやむかしに我身ひとつは

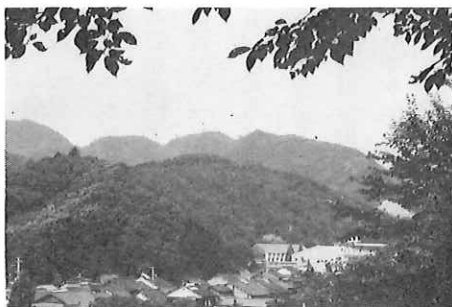


写真 173 入佐山(西面)

鹿はなき月は入佐の山かつら

かゝる木すへの秋そさひしき

と詠むときの入佐山は、月や日の入る入佐山である。実際には入佐山は宗鏡寺の東の山だから、入佐山から月が出て、入佐山に月が入ることはあり得ない。つまり、沢庵の歌といえども叙景写生の入佐山の歌ではなく、王朝時代以来の慣用を踏襲しながら、思いを述べる、つまり叙情を主に詠じたものであったのである。

#### 宗砌と行助

応永の末年から応仁の乱前後まであたりの時期は、連歌れんがの復興期とされる時代である。この時期には七賢と呼ばれる地下じげ(地方)の有力者が輩出したが、七賢のなかには、高山宗砌そうせきと

法印行助の二人の但馬出身者がいた。とくに高山宗砌は、連歌の中興とまで称揚される人物であるが、「高山民部入道沙弥宗砌」という自署があって、もと山名氏に仕えた武士、高山民部少輔時重であったという。

もっとも民部少輔については民部丞という所伝もあり、時重と名乗った点も確証はないが、山名氏の家臣であった点については後述するように事実であった。高山氏の但馬における居城がどこであったか分からないが、高山氏は元来上野国の武士で、山名譜代の家臣として主家に従い、但馬に來住したらしい。

宗砌は和歌を正徹に学び、連歌を朝山梵灯庵に師事した。とくに梵灯庵には、「灯庵主の前を片時さらす承り置候」というほど熱心に傾倒したが、師の没した一四二七年(応永三四)前後には高野山に隠棲いんせいして、



臨終に会うことができなかつた。宗砌は亡師を偲んで、当時高野山に住んでいた啓阿（慶阿とも、俗名真下満広）と二人で追悼二百韻を興行し、次いで『初心求詠集』を著した。

京都では將軍義持の死後、弟の青蓮院義円が還俗して義宣のち義教に改むと名乗って將軍になったが、新將軍はたびたび連歌会を興行し、連歌復興の氣運を盛り上げた。一四三三年（永享五）二月、北野神社に參籠した義教は、一日一万句連歌を張行し、その奉行を幕閣の長老、山名常熙に命じた。この連歌会は会席を二〇か所に設け、各所五〇〇韻の連歌を賦したが、当代連歌界の総動員が行われ、その盛儀は『滿濟准后日記』・『看聞御記』などに記録されたとおりである。このとき宗砌は、赤松滿政の一座に加わってこの盛儀に列した。義教の登場によってにわかには活氣を呈してきた連歌界が、高野山に隠棲していた宗砌を都に呼び戻したのである。同年一〇月、宗砌は京都に草庵を新築し、その歌会を開いたが、山名持豊や正徹らが参会した。

將軍義教はその晩年には恐怖政治をしき、あげくの果てに赤松滿祐に弑殺（目上の人を殺すこと）されたが、連歌史のうえでは毎年のように一万句連歌を興行して、連歌復興の氣運を盛りあげた功労者であり、宗砌は蜷川親当（智蘊）と並んで当代の代表的連歌師として活躍した。山名持豊は宗砌の旧主としてよく宗砌を庇護し、その活躍を保証した。宗砌もこれにこたえて、一四三七年（永享九）には山名熙利家の連歌会の発句をとめ、永享一二年の北野社の万句では山名持豊に一座しているし、一四五二年（享徳元）九月に播磨国八社法楽独吟百韻を賦しているのも、嘉吉の乱で播磨が山名氏の領国となっていたためである。

一四四八年（文安五）五月、智蘊（蜷川親当）が死ぬと、宗砌は連歌界の第一人者となり、同年六月には北野



写真 174 北野神社 (京都市)

であろうという。

一四五四年(享徳三)十一月、山名持豊は將軍義政の不興を買い、細川勝元の懇願で辛うじて事なきを得たものの、本国但馬に隠棲(いんせい)世をのがれ住むことすることを余儀なくされた。このとき、宗砌は宗匠と北野会所奉行を辞して、持豊(出家して宗全と号す)に同行して但馬に下った。旧主の蹉跌(つまずき)は、宗砌が多年築いてきた連歌師第一人者としての地位と名誉を一挙に奪い去ったのであるが、それは山名家臣高山宗砌が避けることのできなかつた現実であった。

宗砌は同年一二月二五日、『行動句集』に加点したが、その跋文(おくがき)には次のように記した。

社連歌会所の奉行になった。北野天神はこのころ連歌の神として尊崇されており、その法楽のための連歌会がしばしば行われた。北野法楽連歌は北野社以外で張行されることも珍しくなかったが、北野社で行われるときにはほとんどが会所で行われたから、北野社連歌会所は連歌界中樞の靚を呈しており、これを主宰する奉行は、連歌師として最高の名誉と權威ある地位であったのである。宗砌は会所の奉行になると同時に宗匠の号を許された。のちに三条西実隆が評したように、北野会所奉行が宗匠となるのは宗砌に始まるという(『実隆公記』長享二年三月二八日冬)。会所奉行を任命し、宗匠の号を許すのは將軍であり、当時第一の実力者であった山名持豊の推挙と後援が、將軍を動かしてこれを実現させたもの

夫公与予音をしること凡三十余歳、情をかよはずこと又二百有里也。帝都の月の本を立わかれて、民国の雪の中に籠居云々

宗砌の籠居（つゝま）（としこもっていること）した「民国の雪の中」が但馬のどこか不明だが、山名氏の居城此隅山城下（宮内）またはその周辺（豊岡市の九日市にいたという説もある）と考えてまず誤りあるまい。

宗砌はその翌年（享徳四）に死んだという。正月一六日であったという伝えもあるが（『梅庵古筆』）、確定的ではない。籠居中に寂しく死んだことだけは確かである。

晩年の宗砌がその句集に加点した法印行助は、宗砌の三〇年来の友人だといひ、これまた山名家臣出身であった。宗砌より少し若く『竹林抄』の七人の作者のひとつで、七賢のなかに入っている。早く出家したため俗系（俗人のときの系譜）を詳かにしないが、出家後は延暦寺東塔北谷の惣持坊に住して法印にまでのぼり、法印行助の名で知られる。一四四七年（文安四）の「何船百韻」が初見で、その後の連歌会の常連となって活躍し、一四六九年（文明元）三月二四日六五歳で没した。

#### 宗 砌 流

法印行助は早く出家して、惣持坊の法印行助として活躍したから、山名家臣の出身というだけにとどまったが、宗砌は主家山名家との関係が深く、また主家に殉じて晩年を但馬に隠棲し但馬で死んだために、山名氏やその家臣の間には、宗砌の流れを汲む連歌の一流が伝えられることになった。連歌の正統は宗砌から宗祇へ継承されてゆくが、これとは別に但馬の山名家中に継承された傍系の一流は、宗砌流の名で呼ばれている。

さて、宗砌流の「連歌手てに葉は」は、次のように相伝されたという（金子金治郎『新撰寛政岐集の研究』）。

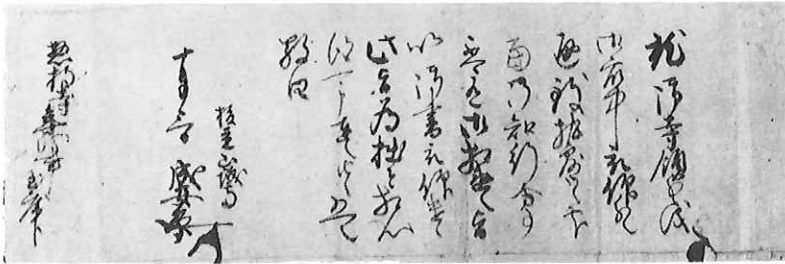


写真 175 榎並山城守書状 (総持寺藏)

高山民部入道宗砌 但州山名幕下臣

大田垣能登守朝定 父へ忠説同前二 同之

松田河内入道友意 宗砌へ懇望 同之

榎並備前入道以安 同之

田左近允（寺）後へ東現 法名同之

相伝第一の大田垣朝定の父能登守忠説（法名聖説）も、宗砌の直弟で南但竹田城主太田垣氏の嫡流である。忠説は一四七六年（文明八）に備後尾道に下向滞在了が、このとき京都にあって連歌を稽古中の子為清のために、『独吟何人百韻自註』を著わして与えたという。この為清が朝定と別人であれば、忠説は朝定・為清の二人の連歌熱心な子をもっていたことになる。このほかに太田垣氏のなかの連歌を好んだ人には、太田垣加賀入道宗寿の名も知られている。

松田河内入道友意は俗名を頼久といい、『聽言抄』ほか二、三の著書のあることが知られている。榎並備前守高能とは親族関係にあったが、備前入道以安は高能の法諱（仏門に入った名前）らしい。榎並氏には榎並山城守とその子与三郎、榎並城州寿閑の名が知られており、これも一族をあげての連歌氏族であったらしい。

相伝最後の吉田左近允広典は猶夢齋東現と号し、但馬出身ではあるが一六一二年（慶長一七）ごろには京都に在住していたことが知られている。

以上のほかに、山名氏の一族としては、当主持豊や山名左京亮瀧利がおり、また金沢（蟹沢）下野入道源意も山名庶流であった。家臣には山本出雲守茂朝・同因幡入道随心、徳丸成長とその子肥前守高長・宇都堅頼・杉原宗伊らの名が当時の連歌書や伝書の奥書、跋文にみえ、また山名氏の重臣垣屋統成も連歌の愛好者であったことが知られている。

山名氏のほかには、現在のところこのような連歌の系譜が明らかにはされていない。その意味でも山名氏家臣たちにおける宗砌流の相伝は、きわめて注目されるのである。

